



No.217

ティーブレイク

## Tea Break

隔世遺伝の笑顔なればこそ

会員 正林 真之

遺伝学が進み、遺伝子レベルまで解析が進んでくると、何気ない日常の「そういえば…」が明らかになってくる。例えば、孫を可愛がる度合いというのは、承継される性染色体に関係があるということであった。

例えば、ある男性の息子の息子に当たる孫息子というのは、自分のY染色体をそのまま承継しているので可愛い。けれども、自分の息子の娘となると、自身のX染色体もY染色体も全く承継されていない。したがって、同じ孫であっても、息子の息子に比べて、息子の娘というのはあまり可愛くないということになる。

けれども、上記の法則を考えるにつけ、本当に不思議に思うのは、私の娘に対する父の可愛がりようである。先の理論によれば、自らのY染色体も、X染色体も、全く受け継いでいない孫娘など、少しも可愛くないはずである。けれども父は、私の娘を本当に可愛がる。

ところが、その理由というのは何となくわかる。実は、娘の顔は、私の母の顔にそっくりなのである。早逝してしまった母とは、特に笑顔がそっくり。そう、まさに隔世遺伝の笑顔。ここまで隔世遺伝というのは見事なものなのかというくらいに、よく似ている。

実際に、既に老人性痴呆を発症している父に娘を会わせに行ったときに、老人性痴呆の進行によって私のことなどすっかり忘れていたような父が、ニコッとした私の娘を見るや否や、それに合わせてほほ笑んだのと同時に涙ぐんだのである。これを見て、私の中の“何となく”は、“確信”に変わった。

よくよく思い起こしてみれば、生前の母に対して、愛の言葉はおろか、優しい言葉すらかけなかった昭和一桁生まれの父。そんな父でも本当は、心の底から母の笑顔が好きであったようだ。そして私も、そんな父の形質を受け継いでか、娘の笑顔を本当にいとおしいと思う。

ところで、エンドウ豆であれば、姿と形だけではあるが、人間というのは性格もある。生前の母とは、もちろん、良いことばかりではない。色々なことでよく衝突もしたし、些細なことで口喧嘩もした。だからといって、母の笑顔や優しいところだけ似て、気の強かったところや少々頑固なところなどは似てほしくないなどという、ムシの良いことは言わない。そういったところは、欠点まで含めて全て承継してくれたとしても何の問題も無いのだ。

けれども、病気がちであった母の人生は少々仕方が無いとしても、終わり方の早かった母の生涯についてだけは、絶対に遺伝してほしくない。もちろん自分も弁理士であるから、自然法則の重さは勿論のこと、その確実なることも重々承知しているし、その願いがまこと非科学的で勝手な願望にすぎないことはよく分かっているのだけれども、できることならばそれだけは遺伝してほしくない。本当にそうならないでほしいと、しみりと、そう思うのである。